

## 世界遺産講座

## 第10講

## 真実性とは

世界遺産講座第10講では、「顕著な普遍的価値」に欠かすことのできない「真実性」について紹介します。

世界文化遺産は過去の人類の英

とでしよう。

知が結集された構造物で、いずれもその地域、その時代を代表する遺産です。現代を生きる我々にとつて、計り知れない技術力や労働力が投入されていることは容易に想像できます。「ギザのピラミッド」や「万里の長城」、「マチュ・ピチュ」などはその姿を見るだけでも壮大な歴史を体感することができます。また、素晴らしい構造物として伝えられています。現在には存在しない「バビロンの空中庭園」や「オリンピアのゼウス像」、「アレクサンドリアの大灯台」はいずれも巨大な建造物で歴史的にも芸術的にも極めて重要な位置を占めます。これらが現存していれば、確実に世界文化遺産に登録されていたこ

科学技術が著しく進歩している現在においては、失われたこれらの遺産と全く同じ構造物を造るこ

とが不可能ではありません。しかし、いくら歴史上素晴らしい構造物であっても、世界文化遺産に求められる重要な基準の一つである「真実性」がなければなりません。今回はこの「真実性」について紹介します。

世界文化遺産の「真実性」とは、「いかに本物であるか」ということとです。時間の経過により刻々と変化・劣化する痕跡の中から、オリジナルな部分とそうでない部分とを正確に分類し、かつオリジナルな部分が良好に残っている必要があります。しかし、地球全域を

対象とする場合、地域によって文化が異なることは当然のこと、気候も大きく異なることから、必ずしも全てがオリジナルで残っているとは限りません。日本のように木造建築物が主流を占める地域もあれば、アフリカ諸国のように土造建築物が積極的に造られる地域もあります。そもそも世界遺産条約が締結された当初の文化遺産の保存修復の規範であったヴェネ

建築物だけではなく、アジアやアフリカなどに展開する多様な文化遺産の保護に大きな影響を与えました。

ツィア憲章では、ヨーロッパの石造建築物をその対象としていました。世界文化遺産が全世界に認知され、多様な地域で登録に向けた機運が醸成すると、既存の概念では対象とならない遺産が数多く出てくるようになりました。この問題への対応として起草されたのが、一九九四年に採択された「オーセニティシティに関する奈良文書」です。木造建築物による文化が発展してきた日本では、その修復において、欠損している部分や腐食している部分を新しい材料へ置き換えることが一般的な方法として伝統的に実施されてきました。この対応策は同年に開催された世界遺産委員会において審査され、認められることとなり、日本の木造

また基本的に失われた構造物に「真実性」を付与することはできませんが、完全かつ詳細な資料に基づく例外的な場合にのみ「復元・再建」が正当化されています。「復元・再建」した構造物が、遺産の本質である地下に眠る遺跡に悪影響をもたらさないことなどを明確にする必要があるなど、高いハードルを有していますが、それらの条件さえクリアできれば、「復元・再建」が認められることとなります。世界文化遺産には、過去の人知を伝承し、当時の最高峰の技術力をもって継承することもあれば、現代の技術力に基づき、「復元・再建」することもあります。いずれも人類の最高傑作に相応しいものです。このような視点で世界文化遺産を見ると、さらなる壮大な歴史を体感できることでしょう。

(明日香村総合政策課)